

今、フジマの
ムントリ、サカナ
たちば...

九条はらまち

福島県南相馬市「はらまち九条の会」 No.195

2012(平成24)年 8月15日(水)発行



＜原町出身の映画監督亀井文夫の作品が、今再評価されています＞

◆亀井文夫は1908(明治41)年4月、南相馬市原町区本町生まれ。父は原町町長を6年間務めた松本良七。◆ソヴィエトで映画を学び、1931(昭和6)年東宝映画に入社。ドキュメンタリー映画を中心に、昭和62年78歳で病死するまで約50本の映画を製作。◆主な作品は、厭戦を訴えた『上海』、反戦映画『戦う兵隊』、戦争犯罪を追及した『日本の悲劇』、被爆者の『生きていてよかった』、原爆の放射能や死の灰の恐怖を訴えた『世界は恐怖する』、遺作が大自然を畏敬せよとの『トリ・ムシ・サカナの子守唄』。◆生涯、反戦・反核・反基地・反差別・反環境破壊を貫いた。◆本会報のNo.61でも紹介しました。

◆亀井文夫著『たたかう映画』岩波新書が、お手頃です。◆1993年に「亀井文夫の映画を見る会」が原町区で、1年間かけて開催されています。ネットで視聴できる作品もあります。◆原町、小高や相馬など浜通りの相馬地方には、権力に抗ったり、時代に警鐘をならす人物を生み出す“風土”があるのでしょうか。

◆原発事故後、再び注目を集め、『世界は恐怖する』などの上映会が関東圏でも開催されています。

『九条はらまち200号記念号』にコメントをお寄せください!

この会報もまもなく「200号」を迎えます。「会報へのご意見」などを、ハガキやメールなどで事務局山崎宛にお寄せください。〆切9月20日。匿名でもけっこうです。大震災や憲法・人権問題、尖閣列島や竹島問題、脱原発などのご意見もお願いします。



67年前長崎で被爆し、原発事故で再び被曝

16

声 Voice
2012年(平成24年)8月15日 水曜日

二つの国策に翻弄された私

無職 永尾 大勝

(福島県南相馬市 78)

長崎原爆で被爆した私は、その66年後、福島第一原発事故で被曝しました。「どうして私が二度も」と国を恨んでいます。1945年8月9日。長崎市の自宅からB29の機体はつきりみえました。青い閃光と爆風。私たち家族は無事でしたが、親戚を捜しに翌日から中心部に毎日通いました。無数の死体とひどいやけどを負った人が横たわっている。地獄でした。

戦後、高校を卒業すると上京し、タクシードライバーになりましたが、やがて放射能が体をむし

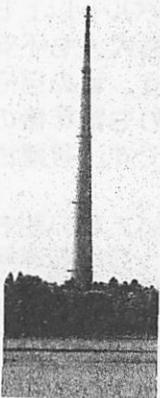
「終戦の日」特集

■長崎で被爆以来六七年間、匿名を通してきた永尾さん(本会会員)が、今回初めて氏名を公表して、被爆と震災体験について投稿されました。※長崎での被爆体験は、本会会報No.109に掲載されています。

しばみ、体調は悪化し、満足に働けない体になりました。でも妻と支え合い、頑張ったおかげで、子どもも巣立ち、念願の中古住宅も手に入れました。

しかし、平和な生活を原発事故がめちやめちやにしてしまいました。地震で腰の骨を折った妻と避難先を転々としてきました。私は原発は危険だと感じてはいましたが、まさかこんなことになるとは。事故の後、しばらく忘れていた長崎の惨状が、しばしば脳裏に浮かんできます。原爆と原発という二つの国策に、一体、いつまで翻弄され続けねばならないのでしょうか。

今、東京スカイツリーブームですが、かつて南相馬市原町区にあった高さ二百餘の《無線塔》のことを子どもたちへ話してやりましょう。「一九二三年九月一日、関東大震災の時に、『東京や横浜が大地震です。助けてください』って、アメリカに初めて無線で伝えたんだよ。そして四一の国から救援が開始されました」と。



無責任な警戒区域設定のために、小高地区は荒廃した

南相馬市小高区村上(原町区に避難)・会員 志賀勝明さん

津波では家族は全員無事でした

私の家は南相馬市小高区村上、海岸からわずか300m、水素爆発のあった福島第一原発から北へ約13kmの地点にあります。私はホッキ貝を捕る漁師で、妻、母、娘2人の5人暮らしで、長男夫婦や孫たちは相馬市の町中で生活していました。



津波で一階が流失した自宅前で、志賀勝明さん。(二〇一二年六月一九日)

昨年3月11日の大震災の時、私はたまたま所用で相馬市に出かけていて、妻は鹿島区で勤務していて、83歳の母は入院中で津波の人的被害からは免れましたが、自宅の1階は流出しました。あの大津波で南相馬市で636人も亡くなり福島県市町村では最大の犠牲者数でした。

新築5年目の我が家が放置されて

我が家は村上海岸からわずか300mの平地ですから、当然あの10mを越す大津波に襲われました。でも5年前の新築の時、1.5mほど土盛りして建てたので、津波は1階の1.2mほどで神棚までは届いておらず、2階はそのまま無事でした。

震災から1ヶ月後の4月18日、まだ津波の水が引いていなかったのですが、自宅に戻ってみると、1階のピアノや箆笥が倒れていたり、強い引き潮のためと思われそうですが、海側のガラス戸2枚がぶち抜かれていました。でもその時は、「この程度なら、後片付けと補修をすれば、またすぐ住めるようになるな」と思っていました。



▲6月19日、津波で1階が大破した志賀さん宅を見学する川崎市の「たかつ九条の会」の人々。津波の被害よりも、放射線量の実態を無視した「20^μSv圏内の警戒区域設定」で立入禁止になり荒廃したことに驚いていました。

20^μSv圏内は警戒区域で立入禁止に

ところが昨年4月22日に政府は、放射能の影響を避けるためということで、原発から単純に20^μSv、30^μSv圏内を円で線引きし、それぞれ立入禁止の「警戒区域」や、いつでも避難できるようにし

ておきなさいという「緊急時避難準備区域」、「計画的避難区域」などに単純に設定してしまいました。

被災した自宅を調べてもらおうと...

我が家は原発から13^{km}地点ですから「警戒区域」に入ってしまった、以後立入が出来なくなり、家の補修も出来なくなりました。

高い放射能は現実には、原発から北西の阿武隈の山間部方向に向かい、浪江町津島地区や飯館村、さらに福島市や郡山市の方向に流れていました。

私たちの小高区の海岸地域は放射線量は意外と低かったのですが、不合理でも政府が一端決めてしまった

ことですから どうしようもありません。

津波から1年1ヶ月経った4月22日、私は自宅の被害をきちんと調べてもらうために、一級建築士を連れて自宅に行きました。すると、「土台の水平も維持され、柱も全く狂っていない」との報告でした。しかし、家の中は畳も壁も変色し、鳥が家の中に巣を作り、2階は誰か知らない人が入っていた状態で、悔しいですが、もうこの家に住みたいという気持ちはどこかへ消えていきました。

福島の子どもたちが大変心配!

ですから、放射線量の高低によらず、単純な同心円による政府の区域設定の線引き方法は間違っていて、それは「政治災害」とも言えます。

震災後1年3ヶ月の6月19日現在、自宅前の放射線量は0.09^μSvシーベルトです。しかし60^μSv離れている福島市や郡山市は0.5^μSvシーベルト以上もあるのに何の指定もないし、子どもも大人も不安を抱えながらも普通に生活しています。私の自宅のことも悔しいことですが、それよりも数年後の福島県の子どものことが大変心配です。避難させないでいいのでしょうか。

また、浪江町の請戸港に停泊していた私の船も流され、漁もできません。入院中だった母も昨年10月に死去。原発事故で命を縮めている年寄りも多いようです。現在は原町区にアパートを借りて、勤務のある妻と二人で生活していますが、何とか元気を出してやっていこうと思います。



2012年3月9日付『朝日新聞』より▲
(●が志賀さん宅の小高区村上)